

アジア・太平洋研究センター，地域研究センター共同研究 「ことばと国家のインターフェイス」 共催講演会

日 時：2010年7月15日（木）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

報告者：陳培豊（台湾・中央研究院 台湾史研究所副研究員）

テーマ：日本統治下台湾の「植民地漢文」

——クレオール化された漢文文体の政治的意義

コメンテーター：紙村徹（神戸市立看護大学准教授）



発表の構成

- 一、台湾における日本植民地統治の特異性
- 二、「同文」の磁場の中の異民族支配
- 三、漢文の「クレオール現象」
- 四、メディアの漢文欄「廃止」をめぐって
- 五、クレオール現象の歴史的 position 付け
- 六、「植民地漢文」から見た文体の政治的意義

本講演会は、アジア・太平洋研究センター，地域研究センター共同研究「ことばと国家のインターフェイス」の共催で開催され、陳培豊氏の講演と、それに対する紙村徹氏のコメントを軸に活発な議論が展開された。ここでは、陳培豊氏の発表内容を中心に紹介したい。

陳培豊氏は、まず欧米植民地と比較した際、日本の台湾統治の特徴として、次の2点を指摘する。第1点目は、「文化上の特異性」である。すなわち日本の台湾支配は

東アジア域内の政治統治であり、黄色人種の漢字文化圏同士の支配であったため、日本の台湾統治は文化上の「類似」から出発することとなり、統治上のヘゲモニーをそのまま文化上に反映させることが難しかったとする。そして第2点目は、「地理上の特異性」である。つまり日本より地理的に近い場所に、「祖国」中国が存在したため、日本の支配下においても「祖国」との間の人的、商業、文化的な交流が途絶えることはなく、台湾の人々は中国との間の文化上の「類似」を維持し、確認することができたとする。そのうえで、このような特徴をもつ台湾の植民地支配を精緻に描くためには、日本と台湾だけではなく、中国、とりわけ漢字漢文の存在が象徴するような東アジア文化圏全体を座軸に据える必要があるという主張のもとに、以下では、植民地台湾における漢字漢文問題が論じられていった。

具体的には、陳氏はまず、前近代の日本において、漢字漢文は権威財であり、知的生産財、教養を誇る消費財であったと指摘する。その上で明治維新以降、西洋文明に対応するために日本は大量の和製漢語を生み出し、さらに漢文直訳体や漢文訓読み体など漢字漢文を多く含んだ文体を生成し、それらの文体は近代日本語の雛形となったとする。そして台湾の植民地統治に際しては、筆談は日本人が台湾の人々と意志疎通をはかる重要な手段であり、その意味で、漢字漢文は統治手段となっていたとする。

そのために植民地支配下の台湾では、統治手段としての「日本式の漢字漢文」をはじめ、「支那式の漢字漢文」「台湾式の漢字漢文」といった多様な漢字漢文が存在することとなったとした上で、そこから引き起こされる台湾における言語文体の混成現象を漢文の「クレオール現象」として捉え、この混成漢文を植民地漢文と位置づけて、その具体的様相が詳細に論じられた。

例えば、陳氏は「中国白話文」運動の台湾での影響について、漢文の「クレオール現象」の一環として論じている。「中国白話文」運動は、1920年代に中国で起こった「言文一致」を目指す言語運動であるが、この運動が台湾の知識人に与えた影響を指摘した上で、陳氏は、台湾における漢文の「クレオール現象」をめぐる構成要素に、植民地統治者、被統治者の言語文体だけでなく、「祖国」という要素も付け加わり、より複雑な様相を呈することとなったとする。その上で1920年代の台湾で興った「中国白話文」運動は、「祖国」という外部から移入された新しい言語文体の運動ではなく、植民地漢文の刷り込み現象による台湾内部から自生した文体の想像と見ることができると指摘する。

そして1930年代になると、台湾の知識人の中から、台湾で日常的に使用される口語体に近い自らの文体の創出や使用を提唱する「台湾話文」運動が起こり、「中国白話文」を支持する者たちとの間で論争が繰り返されるが、台湾に現れた「中国白話文」と「台湾話文」の文体の差異は、想像するより僅少であったという興味深い指摘

がされた上で、陳氏は両文体ともに漢文の「クレオール現象」による「土着文体」であり、また一連の論争は異なる言語のヘゲモニーの争いではなく、植民地漢文をめぐる「言文一致」の論争と捉えるべきだと主張している。

このような議論に基づき、本発表の最後では「植民地漢文から見た文体の政治的意義」という観点から、多くの論点が結論として述べられた。そこで指摘された論点は多岐にわたり詳述することはできないが、先に触れた「中国白話文」と「台湾話文」をめぐるのは、陳氏は次のように指摘する。すなわち一連の論争や出版を経て、「植民地漢文」は一層深化し、複雑、抽象、近代的な項目、内容を担えるようになったとした上で、「文体機能の向上と共に、記述上の標準化も規範化も整っていなかった混沌の社会状況の中で、台湾人は一つの文体解釈共同体として成熟していった」と結論づけるのである。現在、様々な議論をよんでいる「台湾人意識」の歴史的背景という点にも深く関連する問題であり、まさに「文体の政治的意義」を論じた興味深い結論であると思われる。

(文責：松田京子)